【ポスター発表】

障害者支援施設における日中活動の工夫

－高齢知的障害者の活動に着目して－

○　京都ノートルダム女子大学　　矢島　雅子（4911）

［キーワード］高齢知的障害者、日中活動、意思の把握

１．研 究 目 的

現在、障害者支援施設における日中活動の内容は作業的な活動から余暇的な活動、個別活動へと変化している（村岡・小島・反町他 2016）。すなわち、高齢知的障害者が作業的な活動を担うことが困難になっているのである（大橋 2002；小島・菅野他 2003；井川 2011；植田 2011）。

しかし、高齢期に利用者が作業を通して適度に身体を動かすことは生き甲斐や達成感を獲得することにつながるため、作業的な活動の継続は必要だといわれている（植田 2018；国立のぞみの園 2015）。

また、日中活動を自己決定していない利用者は増加しており、利用者の意思を把握した上で日中活動を実施していくことが課題となっている（関口・今村・小野寺他 2007）。

本研究では、ライフストーリーワークと表現活動、作業的な活動継続の可能性に焦点をあて、障害者支援施設はこれらをどのように工夫・活用しているのか明らかにする。

２．研究の視点および方法

全国に設置されている 5874 か所の障害者支援施設（厚生労働省 2015）のなかから利用者の平均年齢が 50 歳以上であり、①全国に先駆けてライフストーリーワークに力を入れている施設を 1 か所、②全国に先駆けて表現活動を日中活動に位置づけて導入している施設を 1 か所、③全国に先駆けて作業的な活動を継続している施設を 2 か所選定した。合計 4 か所の障害者支援施設の施設長を対象に半構造化個別インタビュー調査を実施した。調査期間は 2018 年 2 月～2018 年 3 月の 2 か月間である。インタビューは調査協力者 1 名につき 1 回（約 2 時間）実施した。調査項目は、①施設の概要、②日中活動の内容・方法、③日中活動の創意工夫、④日中活動の課題と展望である。そして、佐藤（2008）による「事例－コード・マトリックス」を活用し、事例分析を行う。

３．倫理的配慮

本調査は「京都ノートルダム女子大学研究倫理審査委員会」の審査を受け、承認後に実施した（申請番号：17-023）。調査協力者に対して、調査の目的や方法、プライバシー保護に関する事項を文書と口頭で説明し、了解を得た上で調査を実施した。

４．研 究 結 果

A 施設はライフストーリーワークを導入し、アルバム作りを実施している。アルバム作りは複数の利用者が会話をしながら共同制作することも可能であり、利用者同士のコミュニケーションは深まる。さらに、支援者は利用者の過去の活動を振り返り、役割や趣味・好きなこと等を幅広く捉え、それらの情報から、現在の利用者の興味・関心を探ることができる。

B 施設は伝統産業を守り、地元に貢献したいと考え、日中活動の一つとして「よしず作り」を導入した。利用者の心身の負担軽減を図るために時々座って作業できるよう、机や椅子も置いている。「よしず作り」において集中力と継続する力は必要となり、頭を使い、身体を適度に動かすことが心身の健康維持になっている。

C 施設は認知力や記憶力を改善する手指機能訓練に取り組んでいる。具体的にはボールペンの分解や組み立て、クリップの仕分け作業をしている。現在、利用者は年齢を重ね、足腰が弱くなり、転倒が目立つようになった。座り作業を続けることはリスクが高いため、休憩時間に足腰の訓練のため、体操を取り入れている。また、作業がない時に身体を動かす運動プログラムの内容を支援者が検討している。

D 施設は芸術的な表現活動に取り組んでいる。利用者は画用紙にクレヨンや色鉛筆で好きな模様やイラストを描き、絵の具で色を塗っていく。描きたい絵は利用者が自分で決め、自由に描くことができる。

5. 考 察

利用者が年齢を重ね、認知機能や ADL の低下が生じたとしても、日中に好きな活動を継続することにより、利用者は残された機能を維持向上させることができる。その際、利用者一人ひとりに何をしたいのか意思を確認し、その希望に応じてプログラムを考案していくことが必要である。日中活動の選択肢の一つとしてライフストーリーワークや表現活動を導入することにより、支援者は利用者一人ひとりと向き合い、利用者の願いに気づくことができる。ライフストーリーワークを導入する際は、利用者の普段の生活の様子を文字や写真、イラスト等で記録しておく必要がある。また、利用者の制作物を保管しておくと、利用者が実物を見ることにより、過去の記憶が蘇る。家族と協力し、思い出を形に残しておくことが望ましい。また、表現活動に関しては、日中活動で取り組んでいる絵画や陶芸、造形、音楽等においても利用者は自分の感情や考えを表現している。

利用者の ADL 低下予防すなわち老化防止のためには、手先を動かす活動が必要である。よしず作りや手指機能訓練をはじめ、アルバム作りや絵画の制作などは手先を動かし、脳の活性化に効果的である。利用者のなかには文字を書き、勉強することを希望している人もいる。文字を書くことはコミュニケーションの一つであり、今後は文字を書くことを日中活動の中に取り入れていくことが望ましい。